現代書鑒

山口彦總書

卷三

K220.72
60
3

K220.72

73

3

現代書鑑

山口彦總書

卷三

東京　光風館藏版

大正
14.11.19
内交

緒言

一　本書は中學校を主とし其の他中等學校程度の習字科教科書に充てんが爲に、多年教授に經驗ある諸家の意見を基礎として編纂したるものなり。

一　本書は全三卷とし、一學年に一卷を充て、一學年毎に楷行草三體を循環的に學習し得べく配列せり。されば一學年だけ課する學校にては卷一を充て、二學年だけ課する學校にては卷一・二兩卷を充つるを以て適當とす。

一　ペン習字は實用的に必要に迫られつゝある現下の狀態に鑑み、特に毛筆と同一筆者の手に成れるものを卷末に附錄とせり。

普天之下莫非
王土率土之濱
莫非王臣

陽氣發處金石
亦透精神一到
何事不成

士魂ハ人類魂ニシテ武士道ハ人間道
ナリ商業モ斬捨御免ノ範圍ヲ脱シテ

人トシテ人ヲ相手トスル以上武士道ヲ
離レテ成立シ發展シ繁昌スベカラズ

倉廩實而知禮
節衣食足而知
榮辱

豹死留皮豈偶然
湊川遺跡水連天

人生有限名無盡
楠氏精忠萬古傳

登山嶽涉川海走數十
百里有時乎露宿不寐

有時乎饑不食寒不衣
此是多少實際學問也

大イナル志氣ヲ涵養センニハ都
門ヲ離ルルコト遠ク山高ク水長
ク萬境自然ナル處ニオイテ清淨
ナル空氣ヲ呼吸セザルベカラズ

正其義不謀其
利明其道不計
其功

良藥苦於口利
於病忠言逆於
耳利於行

政治法律經濟軍備交通
師團聯隊要塞軍港航空

內閣總理大臣次官參與
官局長知事理事官警視

一年之計莫如樹穀
十年之計莫如樹木
百年之計莫如樹人

少年易老學難成
一寸光陰不可輕

未覺池塘春草夢
階前梧葉已秋聲

奢侈は己を削りて己を飾るものなり
知るものも言ひがたいふものゝ知らぬ

樂は苦の種苦も樂も種
病ハ口より入り禍も口より出づ

秋山君大分寒くなつたのお変ぶは勉強だらうね
僕も仰手の通よく働きたく進ふ主義を実行して
居るそのせいの体重八貫よりも一貫目近くふえた僕も
朝の冷水摩擦と米の反省とを入学前最も実行

して居る僕八主を寧ろ意志修養の一方便として
居るたまたま思分情気の生ずる事もあるのそれに
打かつた時の悔快八何ともいへず強ひて勧めも出ぬの
君もやつて見てハどうぶ僕八性に良いとおもふ失敬

開き不良

忠孝実是回帰於
父母曰孝於君曰忠
而以忠孝謀身一也

山川学本特蓋源
十里風程新戦場

泛百尺舟人不語
垂物博知主斜陽

はるしくにあをひやなぎも山あをを
そみてあをきむ反なのり今を

あきしとそ廿六なのふる川水れ
こころやるこのんなるこむ

希望ハ勢力なり希望あるによりて活動し
發展し活動進歩發展ハ青年の特質なり
希望なき青年ハ青年にあらず年齢なのみ

して早く既に老衰せる者なり何時の時
代に於ても青年は希望に富む者なるべし
現代の青年ハ如何して希望多き者といふべし

相原此度近衛諸兵聯隊に出張の事に
おめでとう存じます初の程は大儀と察し申すべく
候へ共追つて面白いものと承りて居りまするから
申上げるまでもなく忠實と釈迦第一に心得

られて居ること彩まる出来の
方も出釈父様へ出高手と申す程でもありませんし
出先輩もおありでなかろう出拵へのもの出産いまい
ぞうの邦家の為には発志ある様希望堪へません

大正十四年十月為
光風館主人囑
半窪山房叢書

附錄

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益ク國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日尚淺ク庶政益ク更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉産ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ

抑ク我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成
跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ
輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ
我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ

恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其
レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名　御璽

明治四十一年十月十三日

萬人買醉攬芳叢感慨誰能與我同恨殺殘紅飛向北

延元陵上落花風　　賴杏坪

古陵松柏吼天風山寺尋春寂寥眉雪老僧時輟帚

落花深處說南朝　　藤井竹外

山鶯叫斷夜寥寥無限春風恨未消露臥延元陵下月

滿身花影夢南朝　　河野鐵兜

春日山頭鎖晚霞驛騮嘶罷有鳴鵲憐君獨賦能州月

不詠平安城外花　　大槻磐溪

千古の雪を戴ける富士の高嶺を一抹の白雲其の山腰を掠むる時蓋し雄大乃観なり

心あてふ見し〻雲ハふそ〻〻〻〻〻〻〻
おもはぬそらにたゝる布〻志のね

霞の奥にもなを花あるを思ふ〻むる時吉野山一目千本の光景ハ殊ふゆの〻き残覺ゆ

〻〻はなの山かすみのおくを志ふねとを
ゆるのきりハはる〻なりたり

試驗中だつたので大へん無沙汰しましたやうく
明日すみますこの〳〵ぢぐ的廣日帰郷しようと思つてゐます
野も山ももうすつかり春となりましたらう僕も試驗の重荷を
下してのんびりした心でその美しい春の故郷へ帰ると思ふと

何ともいへないゆうしい氣分を感じますそして久しぶりで
なつかしい君と毎日遊び暮せるのだとおもふともう魂
ぬけ出して飛んでいきさうでも君もう二日でも僕は
今になつてその二日が待ちどほでなりません

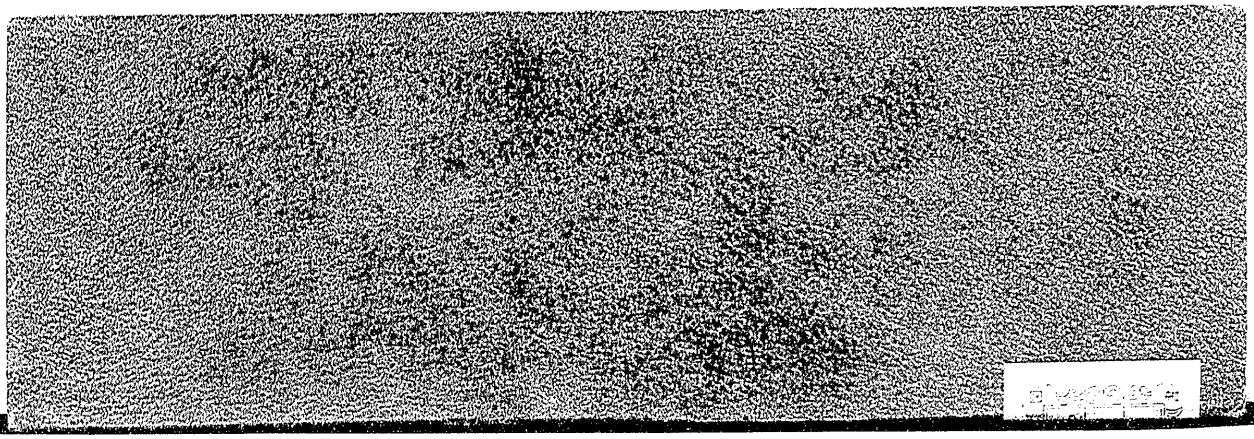
大正十四年十月為
光風館主人囑
半峯山口彦総書

294
93

大正十四年十一月十二日印刷
大正十四年十一月十五日發行

著作權所有

揮毫者　山口彦總
編發行者　東京市神田區通神保町六番地　上原才一郎
印刷者　東京市神田區通神保町六番地
發行所　光風館書店（電話國内手七三四〇番）（振替口座東京三二七番）

定價各金二十二錢
大正十五年度臨時定價金三拾七錢

現代書藝全三册